

2026 年度

文学部 総合型選抜Ⅲ期

(文章読解型)

【小論文】

60 分 100 点

次の文章を読んで、設問に答えなさい。(100点)

さて以下では、世の中を質的に調べるセンスや営みの基本というか、根底に流れている核心について、語っておきたい。それは、端的に言えば、あたりまえを疑うというセンスであり、営みだ。では、どのようにして、あたりまえを疑えばいいのだろうか。

現代の社会学には、私たちの暮らしの大半をおおっている「あたりまえ」の世界を解きほぐして、そのなかにどのような問題があるのかを明らかにしていこうとする営みがある。それは、エスノメソドロジー (ethnomethodology) と呼ばれているものだ。

ethnoとは辞書を引けば「人種、民族の」とあり、methodは「方法」という意味だ。エスノメソッドは「人種、民族の方法」。これでは、なんのこっちゃ？ だろう。

私なりに意味をとれば、こうだ。

人種、民族など、さまざまな違いをもつ人々が他の人々とともに生きている現実があり、その現実を「適切」に暮らすことができるように普段から私たちが用いているさまざまな「方法」のことだと。しかし、これでもまだよくイメージできないだろう。

私は大学で、エスノメソドロジーを講義するとき、学生たちにそれが何かを実感してもらうために、多くの例をあげる。

たとえば、「皆さんは、この教室に整然と座って、私の話を聞いているが、皆さんがこうして教室にすえられたイスにあたりまえのように座っていることは、驚くべき現象ではないだろうか」と。

大半の学生はきよんとし、なに言ってるんねん、この先生は？ といぶかしげだ。

「皆さんがこうして整然と大教室で長時間座っていられることは、これまで受けてきた学校教育の成果の賜物なのだ。

たとえば、私は息子の保育園入園式にでたことがある。そこでは入園する新しい子どもたちが一番前に座り、その後ろに年長さんたちが座り、保護者がいる。そのとき、三〇分くらいの式だったが、新しく入園する子どもたちは、ほとんどが一時たりともじっと座っていなかった。もともと座る子もいれば、立ち上がったろうつく子もいた。私の息子も例外ではなかった。でもそれはある意味でほほえましい光景だ。

しかし、数年後の入園式で私は驚いた。かつてうろついていた子たちが、迎える側にまわり、身じろぎもせず座っていたのだ。私の息子も、それがあたりまえだといわんばかりにおとなしく座っていた。いったいこの変貌ぶりは何なんだろうか。彼らに何が起こったのだろうか。保育士さんたちは、息子に、子どもたちに何をしたのだろうか。

もちろん、それが保育園の教育であり、しつげだよと、説明してくれる人が多いだろう。でも私はそんな説明で納得などしない。

園児たちはどのようにして、入園式などの場でじっと席についているか、ということ、毎日ですごしていくうえで使える知識として理解し、身体をコントロールできる営みを身につけて、日常へ位置づけていったのか。

公の場で、園児として、さらにいえば年長さんとして、適切に、ふるまう『方法』を、息子がどのようにして身につけていったのか。

こんな問いが私のなかに生じてくるのだ。

彼らを、園児にしていく、さまざまな保育園の日常的な実践があるのだろう。しかし、それを『しつけ』『教育』という言葉で〈外〉から説明するのではなく、具体的にどのような実践が、保育士さんと子どもたちの相互のやりとりのなかで行われているのか調べたいと思うし、そこでつくられていく『方法』をとりだしてみたいと思う。

なぜ皆さんは、この教室に入ってきて、無意識のうちに、窓ぎわや後ろの席から座っていくのか。どうして教壇を中心としたあたりが、いつも空いているのか。皆さんがこれまで何らかのかたちで身につけてきた、教室で座る方法。大教室で講義を適切に（あるいは適当に）受ける仕方、を使っているのではないだろうか。

このあたりで、聞いている学生の半分くらいは、はあ、もの見方が違うんだなど興味深い表情に変わり、私のほうを向いてくれるのである。

もちろん他の学生は、あいかわらず、なに言っただ？ と下を向いたり、別のことをしたり、どこを見るでもない、焦点の定まらない視線を保ち、特有のポーズで座っている。

そして、まさにこうした学生の多様な姿勢や営みも、彼らが、大学の講義を受けるのに用いている『方法』であり、その実践が「いま、ここ」で、講義という現実をつくりあげているのだ。

（中略）

「あたりまえ」を疑う。「あたりまえ」に生きていることを疑う。これは、決して自分の生活に対して疑心暗鬼になることでも、人生を斜に構えて生きることでもない。あくまでも、世の中を質的に調べるセンスであり、具体的な営みであると、考えてほしい。常に「方法」を微細に駆使して生きる存在としての人間。普段、私たちは、その「方法」を自分が使っていることを意識することとはまずない。だからこそ「あたりまえ」の日常は、あたりまえのように過ぎていく。

（好井裕明『あたりまえ』を疑う社会学による）

問一 筆者は「あたりまえ」を疑う、ということをごどのようなものであると述べているか。本文の趣旨をふまえ、「方法」という言葉を用いて二〇〇字以内でまとめなさい。

問二 自身の生活の中で「あたりまえ」が疑われる具体例を一つ挙げ、それがどのような「方法」によって「あたりまえ」になっていたと考えられるかについて五五〇字以内で述べなさい。